

II ある日、うみで

あお

梅雨の晴れ間、艶やかな新緑の樹林をおく岬の懸崖。
海は、紫紺の淵、満面の瀟。

フリッパーが捉える確かな水の質感、軽快な呼吸音
は耳をくすぐる。

呼気の泡は玉瑛に輝き、紺青のグラデーションに絢
爛と舞い昇る。

褐藻はたおやかに揺らぎ、浮遊感も心地よく静かに
沈降する。

眼下は紫紺の深淵、水の厚みが息に伝わる

染まりそうな青に、銀鱗がかすめる。

海の中、あおが、かおる。

若き日の冒険

―まだ、潜水の「せ」も知らない時の話―

出来るだけ深く潜る。この際、潜水病のことは問題
ではなかった。深い海底で自分がどうなるのか、そこ
が知りたかった。

やろうとしていることは、スキューバダイビングの
規範を逸脱した蛮勇的行為、それも承知のことだ。あ
るのは青二才の青臭い思いだけだ。

深くなると、毛細管式水深計は当てにならない。当
てになるのはせいぜい二十メートルくらいまでだ。ウ
エットスーツは浮力を失い、腰のウエートベルトはた
だの重量物として、厄介ものになる。

水色は砂の灰色とともに、行く手の暗がり収斂さ
れる。

ぼくと暗がりまでの距離は、一向に縮まらない。そ
こに着いても目前には同じ景色があるだけだ。それを
繰り返している。

目はしょぼしょぼして、まぶたが熱っぽくなる。空
気の密度が高まったせいで空気がトロットとして、レギ
ュレーターの反応も鈍く、吸気がワンテンポ遅れ、排

気は弁をこじ開けて出ていく感じだ。ひと呼吸一呼吸に執着し、たまの深呼吸に助けられながら、もつと深みへ。

不測の事態を想いながら砂地をほう。

吐息は細かく間断なく、霧に覆われたような水景色に、一筋の黒い影となって立ち昇っていく。

たぶん六十メートル、この辺りが限界だった。ぼくの深海底は、寂莫とした砂漠にあつて奥深く、怖さがあつたけど、不思議な多幸福感に包まれた世界だった。

水底の 静けき大地 我ひとり

かといって、ここで恍惚としてはいられない。光の屈折の仕業で、行きは緩やかに見えた海底斜面は、帰りには圧倒的な急傾斜でせまる。ぼくには何トンもの水圧がかかり、扇ぐフィンは極端にになる。ぐいとひと蹴り、グウィツとひと蹴り、はいあがる。呼吸は激しく、心臓は高鳴り、汗もかく。

そうこうしているうちに、浮力が回復する無重量水域に出た。

身震いするほどの深呼吸、マスクを外して顔を洗う。ウエットスーツのファスナーを開くと水の冷たさは

新鮮で爽快、生気が戻る。

水深三メートル。心地よい淡青色に身をまかせ、タングの空気がなくなるまでここにとどまる。

あとのことは、天にまかせて……。

(昭和四十六年秋)

水中銃

「おみやーら、そんな、おもちゃみてーな鉄砲で、魚が獲れるか?!」

水中銃といえ、ゴムで銚を飛ばす、銃身一メートル前後のものが主流だ。

ぼくのはイタリア製で、銚を空気で飛ばす全長四十センチたらずのピストル型水中空気銃。ふともものホルスターにおさまり、おもちゃに似て塗装も派手だ。

漁師の目は、あざ笑っていた。

数十分後、漁師の予想を裏切って、石鯛二枚を突いて海からあがった。漁師の目は、怒っていた。ものも言わずに、バケツに放り込み行ってしまった。

石鯛は、箸をつけるのも惜しい活造りと、煮汁も艶やかな煮つけとなって、夕食に添えられた。

宴たけなわ、漁師は一升瓶をさげてきた。

しばらくして、「なあ、おみやーら、ああゆうもんで魚を獲っちゃなんねえ。いけねえことだし、漁師さんも困るで」もうとつくに、さっきの眼光はなく、バツが悪そうだったし、寂しそうだった。

折しもぼくらのようなダイバーが、水中銃で魚を獲

ることの是非が問われていた。

以来、ぼくの水中銃は埃をかぶったままになる。

フリッパー

岩壁が一気に海に落ちる。

断崖の裾を洗う白波が遥かつづく。

陸と海とのたしかな境目。

大地が終わり、海が始まる。

広がる海。

やがて君のフリッパーは、

しなやかに、

海原に一筋の白い軌跡を刻みはじめ。

盛夏・八丈

太陽の灼熱が空を白くする。熱線は湿度ある空気と合体し、一段と重くのしかかる。風はそよともせず、森は炎暑に黒ずみ、物音ひとつなく、炎天下にすべてが朦朧としている。

時たま腑抜けた波が岩礁に揺れる。小島をへだてる海峡だけが藍色に潮目を騒がせているが、海もまた暑さにひれ伏している。

なま暖かい水はウエットスーツの中でさらに温度が上がる。フアスナーを開けても一瞬の清涼で終わる。高い水温に魚たちも気だるそうだ。ずっしりと深みへ張り出た岩根が陽炎のようにゆれている。

涼を求めて潜る。青みを増した清冽な潮が疾走する。溶岩が固まり海深く張り出した岩根にあたる潮は壁をなめ下り、根の突端からノズルの勢いで流れ出る。凄まじい潮の流れだ。

急流に乗る。飛ばされる。根はみるみる遠のく。やがて強い流れも蒼海に消えた。岩陰に遊ぶユウゼンやクマノミを遠目に涼感を惜しみつつ帰る。ナズマド、

酷暑を和らげるスリルがちよっぴりあった。

まだ、むっとしている夕方。廊下の隅で転がっている者、庭の砂を足で集めている者、うちわを持って呆然と空を見上げている者、太鼓のバチで自分の頭をたたく者、さまざまに沈滞した時間が過ぎる。

宿の親父が、ランニングにステテコ姿でゴム草履を引きずり帰ってきた。手に飛魚をさげている。ちらつと横目で睨んで裏へ消えた。再び気だるさが沈澱する。廊下に足音が響いた。「飯まで、これ食って、飲んでろ」と、親父が皿と焼酎を置いて引っ込んだ。

皿には造作なく氷と刺身が盛ってある。箸をとり生姜醤油で口にした。

美味いっ！

会話が戻った。

すっかり日陰になった廊下に、スーっと涼風が吹き抜けた、感じ……。

掟破り

ダイビングの前は、酒は禁物である。

それも深酒となれば、ますますもつてご法度なのだ。

うーん、だけど……、少しなら……。

潜水行のもうひとつの楽しみは、友・酒・肴が三味一体となった場面なのだ。

気ままな時間に、今日の潜水を語り、明日の海を想う。

これが、たまらない。

海神の裁きに情状酌量を願いで、今夜もまた掟を破る、のである。

海戦

長い時間、両者は対峙したままだ。

ふっくらした丸い膨らみは、あたりの動静に目まぐるしく変色する。その中に目蓋と目玉がある。目蓋は薄目になったり見開いたりして、まわりの様子を探つ

ている。

一方の眼はその物体に集中している。

蛸の目と僕の眼。

僕は蛸と睨み合ってから、ふたつのことを考えていた。

ひとつは、蛸から視て僕はどんな風に見えるのか。蛸はガラス瓶の中にある餌を、足で正確につかみ出すことができる。テレビでこの実験をみたことがある。この動作から、人間の眼とよく似ているといわれている。でも水中生物だから、魚と同じ見え方をしていのではないか。魚の見え方とは、魚眼レンズと同じだろう。

魚眼レンズといえば道路にあるカーブミラーを思い出おす。そうすると、僕の顔は中央に大きく膨らみ、差し出す指は周辺を徘徊する気味の悪い百足のように見えるはずだ。これが本当なのかは、蛸になるか聞いてみないとわからないが、いずれにせよ蛸にとっては威容で異様な怪物が覆いかぶさり、危機が切迫した状況にあることは確かである。

もうひとつは、この蛸を捕まえること。

そこで、漁業調整規則および野生動物保護法を基調とした二国間海中戦条約四項目を締結した。

一、僕は武器や道具を使用してはいけない。手袋も脱ぎ素手になる。

二、僕は蛸の穴に手を突っ込んではいけない。蛸が穴の出口付近に来たときと、穴から出たときに攻撃できる。

三、戦闘時間は無制限。

四、漁業調整規則、野生動物保護法およびスポーツフィッシングの精神に則って捕まえたらリリースする。

微妙な駆け引きと、だまし戦が深閑とした海底に火蓋を切った。ぼくは敵の戦術を探るために右手を差し出す。敵はすかさず陣地の奥に引っ込む。が、再びジワジワと穴の口に展開する。敵はぼくの右手に集中しているはずだ。これで誘い出し、左手で一気に攻撃して捕らえる。この作戦に頭の中の司令部は満悦した。

布陣する。

敵が姿を見せたとき、攻撃時機到来とばかり左手が

動いた瞬間、敵は引っ込む。この作戦を何度となく試みるが、一向に勝機がつかめない。わが軍は三六〇度を監視できる敵の眼球性能をすっかり忘れている。

司令部作戦会議。

「基本的に制海権は向こうにある。条約は敵の総合防衛力を過小評価したものでなかったのか。武器の使用はどうか」

「しかし、条約を一方的に破棄すれば、たとえ勝利したとしても、公の機関からの咎めは免れない。それよりも武士道精神を自ら捨てることになる」

わが軍の戦略は甘く、苦戦の状況にあった。

参謀は、「くそっ！ このタコ！」と低俗で卑劣かつ侮辱的な暴言を吐いている。

敵は、怪物のようなわが軍が襲いかかっている陣地を、一瞬のスキを突いて放棄したいはずだ。おびきだし戦術が検討された。

作戦が変更された。

腕を伸ばせば敵陣に手が届く射程距離ギリギリまで後退する。さらに敵陣より低い位置に伏せて、上目遣いで監視し攻撃のチャンスを待つ。

再び布陣。

水深四メートル。水温十七度。視界良好。兵糧は充分だが、敵は水中の寒冷気候を味方になっている。わが軍は明らかに不利だった。寒さ冷たさで歯は浮き、補給を受ける口元が怪しくなる。戦意が喪失していく。敵はわが軍の苦戦情報を得ているのか、慎重で最前進位置を変更しない。

「凍える腕と手の運びは鈍く、とても敵の素早さに追いつけない」と前線の悲痛が司令部に届く。手の平は白くふやけ、すでに戦死の形相である。

司令部は紛糾した。撤退だ。戦闘継続だ。条約破棄だ。意見は蒼白な海中に右往左往する。

戦闘四十分。

ついに敵の籠城作戦に退却を決意した。戦闘を放棄しようしたとき、敵は、瞬時に、目にも止まらぬ速さで、煙幕を張っていずこへと去った。わが軍は、追撃能力を完全に失っていた。

勝ち目のない、馬鹿な戦に挑んだ僕に、痛烈な寒さだけが残った。

完敗だった。

群れ

シーズンともなれば、ダイビングスポットは、色とりどりのウエットスーツでいっぱいになる。大集団もあれば少人数のかたまりもあって、それぞれ群れをなしている。さながらペンギンのルツカリーといったところだ。

大きな群れは、陣取りも振る舞いも大げさでにぎやかだ。多勢に無勢か、小さな群れは大きな群れに圧倒されるのか、遠慮がちで目を虚空に向けて素知らぬ風である。群れには頭がいて、号令一下、整然と海に入り端然と上がってくる。行動様式は群れの大小にかからず変わらない。

が、面白いことに同じ恰好をして同じ行動をしていても、群れと群れとの間には、それぞれの魔物に支配されているのだろうか、争いもなければ融和もない。喧噪と沈黙の奇妙な群体群。

薄暮。いつの間にか群れは消えていた。海岸を洗う波音だけだ。

そうか、そうだった。かくいうぼくからも奇っ怪な群れの一味だったのだ。あばたがあばたを、もぐりがモ

グリを笑えない。鏡を当てられた蝦蟇の心境か、夕風も重苦しい。そそくさと立ち去った。

浦島太郎

台風が過ぎて空と海は青の同色。海の中は、台風の余韻を残し多少白濁気味だけど、天中の太陽は光線を垂直に射し海の中も明るく快適。こんな日は何かいいことがありそうだ。

瀬浜から北へ。ゴロタ石が点在するゆるい傾斜の砂地を進む。見慣れたコンクリートブロックを見過ごし、斜面が落ち込む手前で小休止。ここから眼下のディープブルー二十五メートルまで一気に下り、ゆっくり浅場に向かいながら散策としゃれる。特に求めるものがあるわけでもないの、のんびり海中景観を楽しむ。途中ツノダシが四尾、間隔を保ってきれいな横並び隊列で過ぎていく。青いキャンバスに黄色と黒の縞模様が一枚の絵になっている。平坦な砂地にはコチが点々とし、近づくときピョンともする仕草で逃げ、そんなに遠くへいかないでこちらの様子をうかがっている。

コンクリートブロックの脇に、おかしなものがいた。尾ヒレが両方にあされてる魚だ。よく見ると一匹の魚が、口いっぱい同種の魚をくわえている。くわえられているほうは、胸びれまですっぽりと相手の口に入っている。魚の名前を覚えるのが苦手なのだが、たぶんコウライトラギス。共食いか？ でもちよつと違っている。押したり引いたり、上下左右にせわしく動きまわっている。だが、一方が口から出されると逃げることもなく二匹ならんで泳ぐ。また一方がくわえられる。こんなことを繰り返している。最後まで見届けてやろうとしばしとどまる。彼らは、そんなぼくに気づいたのかブロックの反対側に行ってしまった。ぼくもそつちへとブロックの上へ、彼らは仲良くちよこんと並んでこつちを見ている。二匹のこの行動はなにか？ きつと求愛行動なのだろう。そうだとしても激し過ぎる。疲れたのか、ぼくに見られて恥ずかしかったのか、ブロックにとまっている彼らの姿が何とも愛らしかった。

おもしろいものを見たところで後にする。すると一匹のベラが同じところを行ったり来たり。ワイヤーで飛ばす模型飛行機のように捕捉されている。気の毒に、

釣り針にかかり釣り糸が切れ、無慈悲にも釣り糸が岩からまっついている。これではどうにもならない。逃れるために懸命にもがいている。もがけばもがくほど針はくいこんでいくだろうに。自由が奪われてしまえば、遅かれ早かれ終焉がくる。ぼくは釣り糸を手繰り釣り針をはずしてやった。途端ベラは一目散にどこかに消えた。どんな漁法でも獲られた魚は食べられて天寿をまっとうできる。こんな状態で死んでしまうのなら、魚にとって甚だ不本意だろう。

朝焼け小焼だ大漁だ。

大羽鰻の大漁だ。

浜は祭りのようだけど

海のなかでは何万の

鰻のとむらいするだろう。

なぜか金子みすずの詩がよぎる。でも、そこは凡人の悲しいところ、亀を助けた浦島太郎とおんなじだ。そのうち龍宮城からの迎えがくるはずだ。果報は寝て待てというけれど、龍宮城からの招待状は、未だに届いていない。

ミスターサマータイム

きょうは午前中のひと潜りだけ。たまにはウエットスーツをカラカラに干してやる。午後は船頭になる。

「ねえー、せんせい、みたっ？ みたー？」かの女は、かたちのいいボディをウエットスーツに包んで迫ってきた。

「なにを？」

目をいっぱいにひらいて、

「ほら、あの、黄色と黒のしましまのさかな。こう、ツノがでている、ねったいぎよ！」

ツノダシのことだ。

「……、いや、見なかった」

本当は見ている。

かの女はスキューバで潜ったのは三回目。前日の二回は、やれマスククリアーだの、やれ潜降浮上だの、と基礎練習にいやした。三回目にして、やっと海の中の様子を垣間見ることができたのだ。写真やテレビでしか見たことのない魚を、海に潜って魚と同じ目線で見たのだ。顔は笑みではちきれんばかりだ。

そこで、

「あれはツノダシという魚で、伊豆でもよくいるものだよ」といったら、どうなるか？ 彼女の気持はすでに南の海へ飛んでいる。

「ふーん、そうなの」

と、現実的な答に夢はみるみるしぼんでしまふに違いない。彼女の初めての感動をこわしたくなかった。

「そう、残念ね。ねえねえ、でも一緒に潜って、見よ！

見よ！」

と誘う。

「うーん、でも、きょうは、おわりなんだ」

「そんなこといわないで、ねえー、一緒に潜ろ」

「……、わるいけど、船頭しなきゃいけないし」

「……？ だれかに、代わってもらえないの」

執拗である。

「うん、まあ……、ちょっと調子が悪いんだ」

「ふーん……、せんせいでも、そんなこと、あるんだ

ー」

「そう、あるの」

「……」

残念そうな顔をして行った。

一緒に潜ったとしても、後にいうことは同じだ。も

し、ツノダシがいなかったら、彼女の気持に、たぶん、一緒に見るのができなかった、それよりも見せることができなかった、誘ってわるいことしちゃった、という気持が残る気がする。そして無口になる。きょうの彼女のダイビングに影を落とす。

禿げチョビのおっさんインストラクターと潜るより、君の心を揺さぶり、ときめかせた、きょうの素敵なミスターサマータイムをいつまでも心に残し続けたいから。

わかってくれるかな。

神津島二題

【防長丸】

ばらばらに砕けた船体は、海藻に覆われ付近の岩に同化してしまっている。それらしきところへナイフを突き立てると、木造の船体は炭化したのか、墨汁のような水が染み出た。「三十年ほど前まではまだ船の形をとどめていたが、波の寄せ返しで残骸になってしまった」と、案内の島の潜水漁師梅田さんは言っていた。

山口県立大島商船学校（現国立大島商船高等専門学校）の練習帆船防長丸は、一九二五年（大正十四年）二月二十四日夜、神津島松山湾に停泊中、嵐に吹き流され座礁し沈没した。

潜ってしばらくは焦点が定まらない。感覚が陸性から水性に移るまで時間が要る。岩礁に砕ける波は白い泡となって、青く透明な水に逆巻いている。じっとしていると、次第に船体の一部や鉄パイプやレンガなどの部材が散らばっているのが見えてくる。沖から一条に引かれた錨の鎖が岩盤に張り付き、末端は大きな塊になっていた。

当夜、猛烈な風が吹いた、という。確かなことはわからないが、船は一気に流され錨も効かず鎖が出るにまかせて島に寄せられた。朽ちた残骸と白い牙を剥いた怒涛が押し寄せる岩壁が迫る状況を重ね合わせれば、まだ童顔の訓練生の悲鳴が六十五年もたった今でも波間に聞こえるようで、海難の恐ろしさがみえる。

この遭難で船長と生徒六人が犠牲になった。神津島村歴史年表にある。生還した生徒のうち一人はいまだ健在だった。

この遠い昔の海難の取材を担当した朝日新聞社会部潜水班リーダーの粕谷さんは、生還者に話を聞きに行くという。海難に遭った人の実話が聞ける、こんな機会はめったにない、なかば強引についていった。

山口県在住の上野定吉さん八十五才。高齢にもかかわらず艶のある褐色の肌を持ち、海が匂う爺だった。爺はセピア色に変色した防長丸の写真をじっと見つめている。目は潤み、堰を切ったように話し始めた。「その夜、急に風が吹きだして船が流された。錨が効かずみるみる寄せられ座礁した。海に飛び込み、夢中で島に泳ぎついた。助かったのは自分を含めて十数人で、比較的元気のいい者が村まで知らせに行った。島の人たちは親切で、私たちに食事や服をくれた」等々。

松山湾付近は、断崖が切り立ち容易に島に上がれそうもない。恐怖の中、闇に渦巻く海を背によく登れたものだ。当時は村までの道は悪かっただろうし、起伏をいくつも超えなければならなかった。いつ萎えても仕方のない心身に鞭打って、伝令に走った者の心中はどれほどのものだったか。爺は当時の惨禍を体現していた。

この海に潜ることがなかったら、この出会いもなかった。遭難のありさまをその怖を、大海に閉ざされた厳しい島に生きる人々のやさしさを、感じることもなかった。

ひとつの潜水が時空を飛んで、ぼくが生まれるもつと前、はるか昔に起きた海難の最後の語り部との縁をとり持ってくれた。もうとつくに人々の記憶にない海難が残した人間模様にも出会えた。もつと時がたてば、防長丸の残骸は跡形もなくなってしまいうだろう。神津島松山沖、海に散った人々の墓標である。

【宝船】

海底の遺物の発見や財宝が引き上げられたことがたまに報じられる。考古学的な発見はさておき、金銀財宝の発見引き上げは男の野心をくすぐる。

海底に眠る財宝。夢とロマンの響きがある。響きの裏に一攫千金という欲望が潜む。財宝を当てることは、なまやさしいことでないと思っている。情報収集と分析、調査、発掘に関わる人や資金や物の組織化、横取りを狙う悪玉からの防衛など、個人的であれ組織的であれ、こういう手順手筈を踏まねばならないだろう。

よしんば引き上げたとしても、持ち主や、あつた場所の国の権利など絡んで全部自分のもの、とするのは難しい。でも、財宝探しは何といつても「熱」、これを持続しなければならぬ。一生を賭ける覚悟もいる。そうまでしてやっつてはみたが、成功例はごくわずかで、億万長者どころか、大半は赤字を残した空しい結果に終わる。だが、ここで平然としているのが真のロマンチストであり冒険者で、頭をかかえるのは商売人だ。海底の財宝、それは男心を引きつけてやまない清濁混交の芳香に満ち溢れている。

「あんた、気に入った、これをやる」と防長丸の案内の梅田さんが小さな硯をくれた。

梅田さんは江戸時代に千石船が沈んだことを知っていて、三十年くらい前に観音浦沖に潜ったときに見つけていくつか拾い上げたものだ。あらかた人にあげて、梅田さんの手元に残った最後のひとつだった。

観音浦沖は、ゆったりとしたうねりを乗せていた。朝日は、島の地肌を琥珀に、灰色の岩壁をプラチナの輝きに、樹木をエメラルドに変えている。財宝という色眼鏡をかけてしまったぼくの目には、大海に浮かぶ孤島も絢爛豪華な冠にも見えてくる。

何が原因だったのか知る由もないが、千石船は時化に弱いという構造的な欠陥があるらしい。たぶん難破したのだらう。

船が沈没する。それが海難でも襲撃によるものでも、そこには無念無情の悲惨な殉職や殺戮があつたはずなのだが、百年以上も前のことなので防長丸のような感傷もなく船乗りたち恐怖の実相も浮かんでこない。夢とロマンは時に非情である。

アクアマリンの海面は疾風のように潮が駆けている。式根島との海峡は、潮がぶつかり合い海面が騒立っている。激しい潮に押されてガイドロープは極限まで緊張し震え、先端のボンデンは半分以上を沈めていく。

潮待ち。ダイバーの間では潮の流れがおさまるまで時間をつぶすことをいう。この時間は船に強い者として心地良いものだから、船酔いする者には身の置き所もなく地獄の時間となる。幸い地獄の門をくぐった者はなく、釣りする者、おもいつきり日光浴する者、世間話しをする者、水平線を凝視する者、まちまちの極楽時間を過ごしているが一定の間隔で時計をにらんでいる。やはり千石船への潜水に気が向いている。

潮待ち二時間半。ボンデンは少し浮いたようだが、六キログラムのウェイトベルトを吊してみるとベルトが斜めに流れた。潮はまだきつい。

しつかりガイドロープを握って潜水開始。身体は強風の鯉のぼり状態。マスクをはがされないように顔面で潮を受けると、レギュレーターのパージボタンが押され空気は出っぱなしになる。潮流が闇雲に襲いかかっている。頼りのロープは緩い角度で海底に降りている。ロープを手繰っていく。水深十五メートルで潮流帯を抜けた。たった十五メートル潜るのにロープを三十メートルも伝ってきた。凄まじい潮流も紙一重で消える海の不思議さ、水が水に滑っている。期待に胸を弾ませ海底にせまれば、あるわあるわ、の遺物。水深三十メートル、群青の水に沈む海底の砂地にびっしりだ。アンカーロープは寸分たがわず、ポイントにあたっている。いくらGPSの時代といってもこの流れだ、船長の勘のよき腕のよきはすごい。

やたら挿り鉢が目につく。百年以上たっても縄がとけずきれいに束ねられているものもある。墓石のようなもの、火鉢ほどの器、陶磁器の欠片、諸々が散らば

っている。財宝で頭が満タンのぼくは、それらしきものを探し、あちこち泳ぎ回ったが不発に終わった。甘いよ、あとで笑われた。

ダイビングコンピュータと残圧計は残り潜水時間を減らしていく。減圧停止もあの潮流では厄介だろう。現実へ覚醒していく。潮流に吹流し状態の減圧停止。銀色吐息は飛んでいく。夢もついでに飛んで行く。

だが待てよ。梅田さんがくれた最後の硯……、たった一回いっしょに潜っただけなのに、なぜなのだろう……。そうか、潜り人どうし、何かを感じてくれたんだ。きつとそうなんだ……。あれがぼくの宝物だったのだ。宿へ帰ったら、さっそく祝杯だ。

(一九九〇年 朝日新聞潜水取材支援にて)

M先生

先生はスキューバ潜水はやらない。素潜り一本である。四十余年間これで通してきた。

若い頃、竹富島から小浜島まで泳ぎ、知り合いのおじいに捕ったタコを届けたそうだ。凄い。島の道々で

出会った人に「どこから来たの？」訊ねられると、先生は「竹富から」とすらりと答えたらしい。道々の人はびっくり仰天、狐につままれたような顔になったという。誰だつて驚く。この話は先生の八重山の海での一コマである。

竹富島に先生の第二の家がある。ぼくはここ十年この先生の家で、「夏休み子ども冒険教室」なるものを開催させてもらっている。もちろん主任講師はM先生である。そのほか先生を慕って集まってくる若者衆、いろいろ手伝ってくれる。年によっては、写真界の偉い先生や先生の古い海仲間が参集したゴツタ煮の合宿になる。年齢もさまざま、見知らぬ人たちと出会い、社会的順列もなく、単なる大人と子どもとの関係で、スノーケルで餃子の皮を作ったり、捕まえた蛸でタコ焼きを作ったり、ワイワイガヤガヤ過ごす時間は子どもたちにとって貴重な体験になる。

先生は、ぼくらが島に着くと荷物の整理もそこそこに浜に連れて行く。コンドイ浜というサンゴ砂の広い浜だ。そこで何するわけでもなく先生はビールを飲み、子どもたちを自由にさせる。初めとまどっていた子どもたちも、水溜りで水遊びしたり、砂浜で貝をひろつ

たり、何を見つけたのか歓声をあげ、まとまって話し込んだり、自分なりに遊ぶ。過去、伊豆の田子・能登・八丈島・石垣島の冒険教室で、印象深くしたものは子どもは遊びの天才とのことだった。ここでも同じで関心を持ってばいつまでも嬉々としている。

いつの間に潮が満ちてきた。もう膝あたりまできている。潮はみるみる上がってくる。速い。そこで先生は、潮の満ち干を語りはじめる。地球と月の関係がどうのこうのではなく、これから始まる海の活動に潮の干満が泳ぐ者にとってどう影響してくるのか実践的な話をする。沖縄や八重山では、毎年スノーケリング（スノーケルと水中メガネと足ヒレを使って泳ぐこと）で潮に流され行方不明になる者がいる。スノーケリングは、ちよつと習えば誰でもすぐにできるようになる。けれど、海の現象——自然現象——は、口で言ってもなかなか分かってもらえない。先生は海の現象を前もって体験させているのだった。

また夕暮れ、茜色に染まる浜に連れだす。子どもらは潮だまりの魚を追ったり、きれいな貝殻を拾ったりしている。そのうち子どもたちはそれを止め、浜に腰を下ろし、黙って太陽が西表島のシルエットに落ちて

いくのを見ている。子どもたちの胸にどんな想いが去来しているのだろうか。「自然は神が描いた偉大な書物である」と英国の生理学者ウイリアム・ハーベイがいった。先生はこの言葉を意識することなく、自然という教科書に案内していく。

一般的には海や山での活動は早出早帰りが原則だが、ここでの海活動の基本は潮の干満にある。先生はその日その時の活動に最も適した潮の時間に出かける。むろん満潮干潮の時刻を確かめているが経験則に基づくものが大きい。ぼくはこれを竹富時間と呼んでいる。潮待ち時間、一見無駄に過ごしているようだが、空を見上げ風に吹かれ、島の気配を感じとることも大事だと教える。

先生が、この域に達するまでには相当な時間を費やしたに違いない。その時間の中で、自然と自己の魂を融合させてきたように思える。先生と島で暮らしていると、だんだんそんな風に思えてくる。

冒険教室の圧巻は、海の遠足だ。無論これに参加できるのは、水泳やスノーケリングを十分習った者たちである。海の遠足は、ラグーン（珊瑚礁に囲まれた水

域、礁湖ともいう)を泳ぎ渡り・遙か彼方の白波が洗うリーフ(サンゴ礁、ラグーンと外海をへだてる所)まで行き、延々連なるリーフをトラバースしてくるものだ。だから潮まわりに神経を使うのである。このへんが先生の先生たる所以で、絶対に一朝一夕で身に付くものではない。

——昭和四十六年だったかロタ島に行ったことがある。グループのひとりがリーフの切れ目から、アツという間に外海に流された。波がリーフを越えてラグーン入る。その水が切れ目から勢いよく流れ出る(リップカレントという)。これに乗ったらひとまわりもなく外海に出される。彼は懸命に泳ぎ波に持ち上げられリーフを越えラグーンに入った。怪我もなく戻れたが、珊瑚礁帯にはこんな危険もある——。

だから先生は潮まわりを気にするのである。

遠足の行動時間は、日によって三時間から四時間。南の海といっても冷える。子どもたちは長袖のTシャツに三ミリのウエットスーツ(ロングジョン)を着る。肌を出さなければクラゲやサンゴから身を守るし、浮身も確保できる。

先生は、子供ひとりが乗れるビニールのボートを引いて泳ぐ。ボートには、飲み水や飴玉やライフジャケットを積んである。疲れたらつかまって休むことができるし、獲物を持ってかえることもできる。黄色いボートは海面や陸上からの目印にもなる。これぞ海上遠足の必需品で、こんな発想ができるのも経験の厚みといえる。

「エーツ、あんな遠くまで泳ぐの？」子どもたちは初め不安を持つが、そこは大丈夫。ラグーンには所々に背の立つ隠れ岩がある。先生はちゃんと知っている。そこで小休止しながらリーフを目指す。リーフに近づくとき水は心持ち冷たくなり透明度を増す。リーフの上部は枝サンゴやテールサンゴの群落、その群落に色とりどりの熱帯魚が群れる。珊瑚の岩には、たくさんシヤコ貝の稚貝が指揮者がいるのかと思うくらい、いつせいに藍色の襞を閉じたり開いたりする。

リーフの切れ目から外海へ飛び出す。高さ二十メートルもある礁壁が連なり、深みは真っ白な砂地が広がり、陽光は群青の水に優美な縞模様スクリーンを織り成し、静かな光の中に魚たちが泳ぐ。

延々と泳ぎ外海に出たときの気分は、汗水たらして

やつと登った山の頂上に着いたときの達成感と同じだ。子どもたちもきつとそうだろう。怖さもあるのか大人に着かず離れず自由に泳ぎ嬉々として遊ぶ。これが先生的海の遠足の醍醐味である。

先生は、手ごころなシャコ貝を見つけるとすばやく潜り、獲る。夕食のおかずになる。動物は他の生き物の命を食べて生きる。人間も。生命として生きるとは、他の命を奪うことである。先生は寡黙な人だから口では云わず、人が生きる日常の根本を行動で示している。

さて、M先生とは三村淳氏のことである。氏は著名なグラフィックデザイナーつまり芸術家である。高名な多くの作家や写真家の本のデザインを手がけてきている人だ。

先生の第二の家と日々の生活で、先生の琴線に触れることができる。いちばん印象的なものは祭壇である。浜で拾い集めた貝殻を敷き詰め、大きなシャコ貝が鎮座している。漁師ならいざ知らず、先生がなぜにこんな祭壇を作ったのか。漁師は糧を得ると神前にお供えをして神に感謝する。そんな習わしがあちらこちらの漁村で見た。もちろん先生も魚介を得たことに感謝しているのだろうが、それだけだとは思えない。先生の

祭壇は、日本的な装飾はなく貝殻だけで飾られている。たぶん貝は自身の海の象徴であって、海そのものが生命体であり、神として崇め祭る心境からきているだろう。

先生はまた伝統、慣習を重んじる。先生の第二の家は沖縄地方独特の赤瓦の古民家である。もう七八十年は経っている。あつちこつち傷んでいるが、修繕にはアルミサッシのような近代建具は一切使わない。同じような古い木材を探しては修復する。この地方の気候風土に最も適した造りに、古きよき人に思いに、広がる空と海に、島にわたる風に先生は同化している。

朝、空が白む頃、ひとり熊手で家の前の道と庭を掃き清める。京都竜安寺の石庭のように丁寧な仕上げる。毎日である。雨の日も風の日も怠らない。この島の慣習だが、島の人だつてサボることもある。その姿、修験者の如くである。

子どもたちにもやらせるが、初めは面白がっているが三日も続かない。しかし先生は強制しない。三回四回と教室に通ってくる子は、自ら進んでやるようになる。子どもたちが、ごく自然に島の空気に馴染むのを待っている。

ぼくがいちばん感銘したのは、遠足で使うビニールボートだ。それは、多くの人はたぶん当たり前のこととして気にもとめないだろう。気になったとしてもせいぜい海女の樽潜りを連想するくらいだろう。先生の海のポリシーは「海を広く泳ぐ」である。それには長時間海に入っていなければならぬ。潮に流されたら、喉が渴いたら、疲れたら、など予想されるトラブルから回避するために行き着いた方法なのだ。ここに至るまでには、いやというほど海から辛酸辛苦をなめさせられたに違いない。工業技術が発達し利便な物が簡単に手に入る時代、人は工夫という行いを忘れてしまったような気がする。一見簡単で当たり前のように見える先生のビニールボートは、熟考と実践を重ねた「正念工夫」の産物である。

ぼくのことと恐縮だが、スキューバダイバーとしての自分は、お釈迦様の手の平の孫悟空のよう存在だと思っている。お釈迦様はフランスのジャック・イブ・クストー。彼は潜水器具つまりハードとしてのスキューバを発明したばかりでなく、産業からホビーのダイビング、水中映像や文学まであらゆる分野の潜水活動をも創造し今に残した。いうまでもなくスキューバは、

人間が水中で呼吸できる生命維持装置である。スキューバを使っている限り、ぼくがどう頑張ろうと、どう足掻こうと、クストーの手の平から抜け出せない。なぜならば、この生命維持装置あつての潜水だから。スキューバを脱ぎ八重山の海を広く泳いでいると、クストーの手の平からすり抜けられた気分になれるからだ。

静かだ。潮騒もない。透明な空に夕日が沈む。砂浜に佇む先生はいう。

この島、この海、この空、この風、この家が、海の原因風景として、子どもたちがいつまでも、心に残してくれるだろう……、と。